鹿屋４Ｈクラブと市長との「“本気”で語ろう会」　会議録

団体名	鹿屋４Ｈクラブ
日　時	平成 28 年８月 29 日（月）18 時 00 分から 19 時 40 分まで
場　所	市役所本庁　庁議室
参加者	鹿屋４Ｈクラブ（山下拓会長外８名）
	市長、農林商工部長、畜産振興監、農林水産課長、畜産課長

意見交換

１　若手農家に対するサポートの充実について

２　若手農家が活用できる事業について

３　鹿屋市の重点品目について

４　女性農業者同士の交流について

○　市長あいさつ

・お忙しい中、“本気”で語ろう会へご参加いただき、感謝している。

・鹿屋市だけでなく、全国的な課題として、新規就農者が少ない現状であり、鹿屋市としても、その対策に力を入れたい。

・今回の会を「語るだけ」で終わらせず、何か一つでも形にできればと思っている。

１　若手農家に対するサポートの充実について（２　若手農家が活用できる事業について）※内容重複のため一括記載

内木場：　担い手や後継者を増やすために、若手農家（新規参入者含む）に対するサポートをもっと充実していただきたい。

市長：　新規就農者の確保については、まず市が単独で行っている新規就農者就農支援事業という事業があり、独立に向けた農業研修中の生活費を支援するもの（月額単身：15 万円以内、夫婦 20 万円以内）がある。次に、国の青年就農給付金という事業では、研修中と独立就農以降の合わせて最長７年間、毎年最大 150 万円を交付するものもあり、他の産業と比べてみても、これだけの金銭的支援がある分野はなかなかないと考えている。

また畜産においては、新規で始める際には素牛導入に１頭あたり 80 万円程度かかり、初期投資に場合によっては億単位の借金を負うこともある。そういった畜産の新規就農にかかる負担を少しでも軽減することは特に大きな課題だと感じている。今年、市単独で新たな研修支援事業を計画しており、10 月から２人の新規就農者が研修に入る予定である。

輝北にある農業公社に関しては、スプレー菊での新規就農者に対して支援を行ってきたが、希望者が少ないことや今後の役割の再検討などの意味を含

め、今後は新規就農のためのサポートセンター的な役割を持たせ、ただ補助金等を出すだけではなく、総合的な相談を受け付ける場所として、輝北だけでなく、鹿屋市全体の新規就農者支援に対応できるよう、検討しているところである。

また今からは流通部分のサポートができないか検討しているところであり、農業商社というものを検討している。鹿屋でこういったものを作れないかなどの消費先のオファーを各農家に紹介して共同出荷をしないかとか、こういった新規作物を作ってみないかなど、農業の商社機能（個々の農家を緩やかに束ねるような機能）を行政として支援できないかと考えている。

新規作物への取組を支援する事業もあり、トレビスやキャッサバ、リコピンニンジンなどが新規作物として取り組まれている。皆さんも、新規作物に取り組む際は相談してほしい。

鹿屋市内では、リナシティなどで朝市を開いていて、先日立ち寄ったところ、農業の街の朝市にしては、地元の野菜が少なくさみしく感じた。年に３４回くらいからでもいいので、４Ｈクラブで旬な野菜を売る朝市などしたらどうか。

個々の農家を応援することはなかなか難しいものもあるが、みなさんが一体となって取り組むものについては応援しやすい。みなさんはいろんな品目を作っているので、先ほど申した朝市や、食育に関することなど提案してもらえたらと思う。

畜産振興監：畜産に特化した話をすると、肉用牛は０から始めると~~すると~~、５、６年は赤字を覚悟しなければならず、初めに 20 頭規模で始めたとしても 2,000 万円以上借金しなければならない。そこをどう支えるかが大事だと考えている。新規就農者の話を聞き、収支のシミュレーションをしながら、緻密に計画を立てなければならない。

市長：　市職員には、補助事業を使って農家が機械を入れる際は、過剰投資ではないか、しっかりシミュレーションをして、経営の負担にならないような計画作りのサポートをしなければならないと指導している。市がミスリードして農家にとって大きな負担となることはあってはならない。関係機関も含めた計画作りのサポートが必要である。

南　：　将来自らが新規就農しようと思ったときに、この作物ならこれくらいの規模で、これくらいの機械が必要で、就農開始時にこれくらいの費用がかかる、といったモデルケースのようなものはないのか。

市長：　自らがやりたい作物であるとか、目標とする所得などの情報があれば、概ねの金額は計上することができる。

南　：　全く農業の知識がない人が相談に来たときに、指標となるようなものがあ

ればいいと思う。

市長：　全く技術がない方については、まずは研修を受けたり、法人で雇用されたりして技術を習得してもらいたいと考える。その上で経費や収入の参考になるような情報は提供したい。

３　鹿屋市の重点品目について

山下：　鹿屋ブランドで売り出している農作物、または今後売り出そうとしている農作物は何か教えていただきたい。また、そのＰＲ方法についても教えていただきたい。

市長：　「この地域では、この土地条件だからこの作物しかできない。」といった事情があるところは重点品目を考えやすいが、鹿屋市の土地はいろんな作物を作ることができる。そのため、かえって作物を絞って重点品目化することが難しいのも現状である。

　鹿児島県では、ピーマンやキュウリ、スプレー菊、畜産関係のもの等を重点品目としている。また大隅でいえば、ゴボウを「大隅のゴボウ」としてブランド化していく可能性がある。

農林商工部長：鹿屋市では、紅はるかの認証制度を設けブランド化を進めているが、青果用ということで収穫時に傷を付けないように注意することや、収量が少ないため、単価が上がらなければきつい状況がある。また、独自に認証するために厳しい要件を設けているため、手間暇をかけて作っても、いいというほど値が上がっていない状況がある。

畜産振興監：「消費者が何を求めているのか」というところを調査して、それにこたえることができれば、それが付加価値として評価されることもある。いろいろな観点から考えることが必要だと思う。

市長：　先日海外に行ってきたが、ターゲットをどう考えるかが重要だと感じた。富裕層のみに絞るのか、中流層や低所得者のどのあたりまでをターゲットにするのか。皆さんがどういった売り方をしていきたいのか、いろいろな検討が必要だと思う。

４　女性農業者同士の交流について

前田：　女性農業者と交流を持ちたいと考えているが、女性農業者は鹿屋市にどれくらいいるか教えていただきたい。

市長：　現在、鹿屋市の女性農業経営者は、少し前の資料ではあるが 285 人で、男性の 3,004 人から比べると１割程度の人数である。しかし、夫婦で農業をしている人も含めて全体の人数を見ると、男性 4,257、女性 4,104 人で約半数の割合となっている。

　認定農業者になっている女性は 15 人である。鹿屋市全体では 660 人程度い

るが、肉用牛経営が多い。これを見ると、頑張っている女性も一定数いるという印象はある。

若い農家同士の交流は４Ｈクラブ員同士の交流以外にはないのか。

上村：　ほとんどないところである。４Ｈクラブは肝属地区の次は県の４Ｈクラブになるので、大隅半島の４Ｈクラブ間での交流を持ちたいと考えている。自分は全国４Ｈクラブの理事をしているが、やはり鹿屋の中だけの情報には限界がある。そういった場に積極的に参加しなければ、経営にプラスになる情報は手に入らないと思う。

大平：　出荷先によっても情報の入り方が違うと思う。自分のところは県外に出荷しているので、県外の情報も入りやすい。他の４Ｈクラブ等との交流の機会がある際には、事情はあるかもしれないが、忙しいと言っていても始まらないので、積極的に参加してほしいと思う。

市長：　最近は有機農業についてもブームが来ているようであるが、需要はあるので売り先はあると思う。ただ、有機農業はなかなか規模拡大も難しいと思うがどうか。

柳澤：　有機農業は反収をどれだけ上げるかが大事になってくる。昔からある農法だが、今になって技術が見直されている。見た目が悪いものについても、昔からすると評価が変わってきているので、これから取り組んでいきたい。

市長：　最後にみなさんの「夢」について教えていただきたい。

南　：　市外の出身だが、鹿屋に骨を埋めるつもりで来ているので、将来独立して鹿屋の農家として頑張っていきたい。

大平：　親元で働いているが、うちの経営は機械類に強いことが強みで、どの分野でもそうだが、機械は常に進化していくものだと思っている。鹿屋がそういった機械に強い地区であってほしいという思いがある。機械をうまく使うことで、農業を楽しく、楽なものにできればと考えている。

釘田：　小さい頃からの夢は「農家になりたい」というものだった。今は１品目しか育てていないが、「農家」とは決して１品目だけを作ることではないと思っている。せっかく日本にいて春夏秋冬があるので、旬の作物も作りたいし、簡単に言えば百姓になりたい。百のことをやってみたい。

上村：　３人の娘と、「農業と商業」といった関わり方で一緒にやれたらという思いがある。また、観光農園の野菜に特化したものをやりたい。新鮮な野菜を提供したいので、消費者自らが収穫できるような農園をやりたい。農業は大変だとか、汚いとかいうイメージがあるが、そのイメージを覆したい。そのことで、農業そのもののイメージを変えて、みなさんに農業を好きになってもらいたい。

山下：　単純に儲かりたい。いい家に住んでいい車に乗りたい。経営的には売り上

げはそれなりに確保できるので、あとはコストをどれだけ下げられるかというところに気を付けている。そして、「いいものを出荷したい・出荷している」というプライドがあって、安定していいものを出荷している人がもらえるスーパーオールグレード賞（県酪農協同組合）を、全体で１割程度しかもらえないものだが 10 年以上もらえているので、続けていきたい。

内木場：　現在の職場に雇用されて２年経つが、５年目までには独立したいと考えている。今はそのことだけ考えている。

前田：　女性農業者として自分にしかできない経営をしたい。農業のイメージは汚いとかきついとかいうものが多い。自分もきついな…イヤだな…と思うことがあるが、そういう風に思う私でも農業をやっていけると見せることで、農業のイメージを少しでも変えていけたら、女性が農業しやすい環境に近づいていくのではないかと思っている。

柳澤：　会社としては海外に輸出していきたいということと、農業の３Ｋを払拭していくということがある。個人的には、自然が好きで、教育にも興味があるので、自然学校やフリースクールが面白そうだなと考えている。あとは外国の貧困国での農業教育としては、土さえあればできると思うので、そういったものにも興味を持っている。やりたいことが多く、まだ絞り切れていない。

若松：　将来は焼き肉屋を経営したい。和牛の一貫経営をして自分が育てた牛を使って、兄弟６人と協力して、焼き肉屋をしたいという思いがある。

市長総括

２時間弱の短い時間だったが、みなさんが本当に農業に誇りを持っていて、農業が好きなんだなと改めて感じた。そして最後にみなさんの夢を聞いて、みなさんの素晴らしい夢に感激するとともに、応援したいという思いが募ったところである。それぞれが経営者・社長なので、なかなか人の真似をするのは難しい部分があるが、いろいろな人と情報交換して、経営の参考にする機会があればいいと思う。今回の話に出てきた、大隅全体の４Ｈクラブでの仲間づくり、情報交換をしたいとの話もあったが、ぜひ実現して若い人たちとの輪を広げていってほしい。若い人たちが元気でないと街も元気が出ない。一人で孤立せずに、いろんな人に相談しながら、鹿屋市の農業部分での街づくりの中心となって頑張ってほしい。

苦労はあると思うが、みなさんが苦労を乗り越えて、前を向いて素晴らしい経営者になることを心から願っている。我々もみなさんをサポートできるような体制を整えていきたいので今後ともよろしくお願いしたい。